

博士論文内容要旨

1950年代-1960年代における中国文化論の展開  
——徐復観と殷海光を中心として——

東北大学大学院国際文化研究科  
国際地域文化論専攻  
陳 熙

2018年

主指導教員：勝山稔 教授  
副指導教員：佐野正人 准教授

## 1950年代-1960年代における中国文化論の展開

——徐復観と殷海光を中心として——

### 要旨

本研究は徐復観と殷海光の文化思想比較を中心として、時代の状況と課題を照らし合わせながら両者の文化思想の構造、特徴などを重点的に検討し、それとともに、戦後における「新儒家」<sup>1</sup>と「リベラリスト」の論争の一つの側面を解明するものである。1950-60年代に発生した徐復観と殷海光の論争は中国近代以来の文化論争と深く関わりつつ、時代的特徴を鮮明に呈した。本研究はその特徴を明らかにすることを目的とし、中国近代に発生した種々の思潮が1960年代の時点でどこまで発展していたのかを考察し、「後五四新文化運動」世代の思想がいかにして展開したのかを思想的に把握するものである。

上述した本研究の目的について、具体的な問題と対象は以下の通りである。

まず、西洋文明との接触以降、「中西文化の優劣」、「中国文化の本質」、「中国文化の発展方向」などの課題をめぐって知識人の間で盛んな議論がなされた。その後抗日戦争の勝利、国共内戦、兩岸の分治を経て、1950-60年代に入るとこの一連の課題が再び取り扱われるが、本研究は、その際に議論の内容と方法がいかなる変化を遂げたかについて検討したい。この課題を明らかにするために、本研究では戦後を代表する思想家である徐復観と殷海光を研究対象として選定した。徐復観と殷海光はそれぞれ、「新儒家」と「リベラリスト」の旗手となる人物である。両者とも中国の近代化に対して強い関心を持ち、一連の文化問題をめぐって大量の著作を残し、文化革新以降中国の目指すべき方向を探求していた。したがって、グローバル化と反グローバル化の衝突が激しくなりつつある今日の世界的な文脈において両者の文化思想の先見性を引き出すことが本研究の基本的な問題意識の一つである。なお、当然のことながら、本研究は両者の異同を提示することに限らず、両者の文化思想を考察する従来の諸研究の不足を補うよう努力したい。

本研究の第二の狙いは、「後五四新文化運動世代」の思想のあり方を考察することである。中国の近代化を大きく方向づけたのは「五四新文化運動」だと言える。伝統的思想文化を全面的に攻撃の俎上に乗せると同時に、マルクス主義・リベラリズム・プラグマティズム・社会進化論・新人文主義・国家主義などの欧米の新思想を取り入れ、その中で中国近代化の方向を模索していた。その経過は極めて複雑で、その影響も極めて大きい。「五四運動」以後

---

<sup>1</sup> 新儒家 (Contemporary New Confucian) とは 20 世紀 20 年代に生まれ、『儒家の道統』を継ぎ、宋明理学を心に抱きつつ、儒学の学説と西学とを融合し、近代化を図ろうとした学術思想の流派である (福島仁 [1999]「現代新儒家思想研究の問題点—新理学研究序説」『国際交流研究: 国際交流学部紀要』1号, p 22, フェリス女学院大学)。所属する人物は、第一世代: 梁漱溟、熊十力、張君勱、賀麟など、第二世代: 張君勱、唐君毅、牟宗三、徐復観、方東美、第三世代: 金耀基、劉述先、杜維明などである。

の中国の諸思潮を振り返って見ると、その発端の大部分は「五四運動」に遡ることができる。そのため、「五四運動」は多様なアプローチにより考察され、多くの研究の積蓄がある。「五四運動」に関する既存の研究について本章の第二節でまた検討するが、ここで強調したいのは「五四運動」に対する議論は活発に行われてきたものの、「五四運動」に関する問題は決して解決してはいなかったということである。とくに「五四運動」の外延つまり「五四運動」の影響を被った世代の思想はまだ十分に検討されていない。「五四運動」時期に育まれた思潮のそれ以後の発展状況、「五四運動時期」が「後五四運動時期」といかなる連続性があるのか、また先行研究で指摘された「五四運動」の種々の特徴がいかなる変化を遂げたのか、などの課題は依然として軽視されていると言える。「五四運動」のもとで成長し、「五四運動」の精神を継承した世代の思想が成熟期を迎えたのはまさに終戦直後に当たると考えられる。そして、本研究が取り上げた徐復観と殷海光はまさに戦後知識人の代表と言える。両者とも積極的な欧米受容で伝統社会の改革を試み、また一つの分野で活躍した専門家であったというよりも、歴史、経済、社会、政治などさまざまな分野にまたがって発言した人物である。そして彼らは戦後から 1960 年代にかけて活躍した知識人の中で最も多作であり、最も広く読まれた人物であるだけでなく、両者の門下から各分野で脚光を浴びる弟子が輩出されたことから分かるように、優れた教育者でもある。以上の理由により、「後五四世代」を振り返る際、影響力の広さと深さから、まず徐復観と殷海光に着目したのは当然の試みといえるだろう。それゆえ、本研究は両者の学派の立場を越えて共有されていた発想を検討し、そこから「後五四運動」世代の知識人のあり方を考察することを試みる。

本研究の最後の狙いは台湾外省知識人の思想のありかたを考察することである。「五四新文化運動」を代表とする中国の文化・思想的運動は、「民主と科学」の旗を掲げ、様々な困難を背負って近代化の道を模索してきた。しかし台湾地域は、日本の植民地統治の背景の下に、兩岸の交流は反植民地運動の一部として抑圧され、十分な交流ができなかった。1945 年 8 月 15 日の抗日戦争の勝利により兩岸の往来が新たにスタートを迎え、多くの大陸の知識人は台湾省に赴き、台湾地域の近代化に貢献している。したがって、本研究は同じ外省人とする徐復観と殷海光が持つ思想的特徴を考察してみる。

以下に本研究で得られた主な結論を述べる。

**第一章**では、本題に入る前提となる予備的考察を行った。第一節では同じ湖北省の農村の出身である徐復観と殷海光の略伝を述べた。両者は国民党の統治の下で近代的価値観を唱え、文化革新論を以て活動を続けた。両者は 1945 年に重慶市で出会い、その後、長年の交友を保った。知識人の社会的責任を自覚した両者は、政治・社会問題に対して積極的な言論活動を行い、論壇において中心的な存在として活躍した。その一方、両者は近代中国知識人の文化変革への関心を引き継ぎ、近代国家に相応しい中国文化のありかたを模索し、その過程で様々な文化に関する課題について論争を行った。

第二節では、両者が活躍した 1960 年代の「中西文化論戦」が発生した原因、および過程を説明し、「論戦」におけるいくつか代表的な文章を取り上げ、その主旨を説明した。

**第二章と第三章**においては、二人の思想家の文化論を、西化思潮批判という側面から捉えようと試みた。**第二章**では、徐復観が「西化派」の言論を批判することを通じて、中国伝統文化の重要性を説いた経緯を明らかにした。第一節では、胡適の伝統文化批判に対する徐復観の一連の反論を考察した。「中国文化が玄学的、萎靡的、精神価値ない」という西化派の論調に対して徐復観は、文化価値が決して科学技術の有無によって判断されるものではないと指摘し、西洋文化の本質が宗教的・差別的なものに対して、中国文化が生活への楽観主義であり、現実を超越するような形而上学的・宗教的なものに支配されず、精神的実践を重視する文化であると主張している。個体生命に関心を抱く中国文化が、工業化の危機に苦しむ世界にとって大きな価値があると彼は主張する。そして、中国伝統道徳は西洋のような宗教的教義ではなく、生活経験に立脚しているものであるゆえに、実践力がある生活の指導原理であると彼は強調した。

第二節は、近代化の実現のために民衆の権利を重視せず、ただ個人精神の向上を主張し、空疎な道徳論が自由民主を妨害するという「西化派」からの種々の批判に対して、徐復観の反論を検討した。徐復観はリベラリズムを否定せず、逆に西化派のリベラリズムへの理解不足を指摘し、リベラリズムをいかに解釈すべきかについて西化派と論争した。張仏泉や殷海光など西化派が、個人の自由権の実現や権利保障制度の確立を第一義的なものとしているのに対して、徐復観は欧米のような近代化による精神的危機を避け、中華民族の長期的な発展のために、自由の根本にある精神の自由を人々に学ばせねばならないと強調した。また、中国伝統文化がリベラリズムの定着を阻害するという論調に対して、徐復観は、中国伝統文化の中から自由のあり方を発掘することで、中国伝統思想とリベラリズムとの親和性を説いた。そして、これを論証するために、徐復観は中国社会における階層流動性の高さの根幹に、儒家の自由観の存在があると分析し、その起源が孔子の教育思想と階級思想と密接に関連していると指摘している。かかる考察から考えれば、徐復観にとって、正統な儒学は中国を支配してきた封建的な思想とは相反するものであり、現在なすべきことは、中国文化における自由平等のあり方を認識することであった。

**第三章**は、前世代の西化派である胡適と陳序経に対する殷海光の批判から、彼の思想の特徴を提示した。第一節では、殷海光の胡適批判についての検討を行った。殷海光は高く評価する胡適思想の一つは「実用主義」である。しかし、殷海光の目に映った晩年の胡適は、次第に実用主義的精神を離れ、現実問題を回避し、知識人としての責任から逃避した墮落した知識人に過ぎなかった。その理由は、胡適における実用の前提である論理的思考の欠如であると殷海光は考える。つまり、論理的思考の欠如によって、胡適は複雑な物事を捉えることができず、考証研究しかできなかったというのである。そのため現実問題に対峙する際に、

まず問題を論理的に捉えなければならない、というのが殷海光の主張である。

殷海光はこの考えを踏まえ、胡適の「全盤西化論」への批判を行っている。胡適が西洋文化を全面的に導入すれば、あらゆる問題を一挙に解決できると考えたが、それに対して、殷海光は、中国の現実問題を論理的に捉える上で、実際的な方策を探求すべきだと主張している。

第二節では、陳序経と殷海光との中国文化観にポイントを絞り、両者の描く「中国文化の性格」に対する認識を比較した。殷海光と陳序経は両者とも、中国文化にとって西洋文化が異質のものではないことを主張し、中国特殊論を否定している点では一致している。だが、両者が採る根拠は異なっている。陳序経の「西化論」では、「中国文化西來說」を源泉とする傾向が見られ、中国文化が西アジアから伝来したものであり、中国文化がそもそも中国固有のものではないと考えている。一方、殷海光は始源的中国文化が西洋と同様な多元性を有することを力説し、中国文化の本質を回復するために、今日の多元文化のモデルとされる西洋文化を志向すべきであると主張している。

第四章からは、徐復観と殷海光との文化論に関わる課題を、各論ごとに詳細な比較分析を行った。まず**第四章**では、文化観における両者の相違点と共通点をより明確に確認するために、両者による「文化」に対する定義まで遡り、そこから、文化の生成、発展における人間——とりわけエリートの作用を強調するという両者の共通点を見いだした。また、二人は中国文化を論じる際に、一元的な文化観を持たず、伝統文化を庶民文化（低次元伝統・小伝統）とエリート文化（高次元伝統・大伝統）に分けて理解し、エリート文化の定着こそ中国文化革新にとって努力すべき方向であると強調している。胡適らの西化派は、西洋における自然科学の発展がそのまま西洋文化の精神価値の高さと等置しているのに対して、殷海光は「中国文化の道德面は西洋の道德と同等の文化基盤とした価値を有する」と理解し、文化相対主義の一面も示している。

しかし、以上の共通的な認識を有するにもかかわらず、中国歴史を如何に受け止めるのかという課題という点において、両者のはっきりとした違いが現れている。中国歴史を注視する時、徐復観の眼に映じたのは、知識人の活躍と民衆の生命力であり、皇権専制の抑圧の下にも、伝統文化が伏流として民間社会に資している点である。伝統文化が持続的に社会に良い影響を与えた理由は、中国文化が上古から原始宗教の支配から脱し、また中国文化の核心になったのが自由平等の理念を持つ儒家であったからであるという。その一方、殷海光から見れば、秦代以後の中国歴史は、戦乱が続き、経済と文化の発展が著しく停滞した歴史である。こうした歴史の中に生きている中国人は、為政者から弾圧や貧困の圧迫によって卑屈で萎靡な性格が基本である。また、中国はキリスト教のような支配的な宗教組織を持たなくても、家父長制の下にヨーロッパと同様に宗教色が濃厚であったと殷海光は指摘している。

第三節では、中国文化の危機に陥った原因の所在について、両者の見解の相違からアプロ

一チを試みた。

殷海光から見ると、中国伝統文化には本来「復古性」があるという。そのため、伝統文化を顕揚しようとする保守派が中国文化の「復古性」を助長することは、中国文化の進歩にとって最大の障害である。また、中国文化の危機を克服する道筋は不断的発展と異文化の接触によって伝統文化の悪弊を淘汰することにあると殷海光は指摘する。しかしその一方、徐復観は、中国文化の不振の原因は中国人の固有の共同信仰たる儒教的価値観の衰退にあると考え、盲目的な伝統文化否定が、さらにその衰退を促すと批判している。人々が仁性を向上させれば、科学の悪用や民主の功利化が生まれてくる余地がないというのが彼の主張であった。

**第五章**では、両者の相違点という課題を「科学と道德との関係」から考察した。殷海光は、科学から経験的事実に対する論理的分析を行うことと提唱し、そして、科学的精神とはイデオロギー・先入観・価値判断が含まれるすべての「有色的思想」を排斥し、価値の中立ないし無価値の「無色的思想」を追求すべくものであると主張している。その一方、徐復観は思想の客観性や中立性の過度の強調が、精神の向上や理想主義への追求を放棄させ、結果的に人間の墮落をもたらしたと反論した。また、「無色的」科学と「有色的」精神がそれぞれ独立的なものとする殷海光の主張に対して、徐復観は科学と精神がいずれも人間の所産であるため、相互補完的な関係を有すると指摘する。つまり、社会のレベルにおいては、精神的価値を保有する文化が自由思想の基盤を強固にし、科学の発展を促進し、個人のレベルにおいては、道德を持つ科学者が、科学の悪用を防ぐことができると徐復観は考えている。

また、「科学的な方法」の適用範囲をめぐる二人の対立も検討した。殷海光は科学的精神を強調したが、道德を疎かにしたわけではなく、経験の世界に対する研究方法に基づいて精神世界を探求すればよいと考えた。それゆえに、彼は現実生活にとって有用的な道德を獲得するために、道德を科学的方法で実証的に探求することで、道德の適応性を測り、現実の需要に符合している徳目を作り出すべきであると主張した。

その一方、徐復観から見れば、殷海光の考え方は科学万能主義にすぎないとし、科学は人間精神の領域に侵入させれば、人間が動物と同一視され、人間が矮小化される恐れがなるとした。したがって、徐復観と殷海光の間の最も根本的な違いは、「科学的な方法」の適用範囲に対する理解の違いである。

**第六章**では、殷海光と徐復観の知識人論を取り上げて比較し、知識人の優位を強調するという両者のエリート主義的な主張が酷似していることを明らかにした。

筆者は徐復観の『両漢思想史』と『學術与政治之間』とに対する解説を通して、徐復観が提示した「民」の概念は単純な庶民ではなく、「士」いわゆる知識人を含むということを明らかにした。徐復観は民意に基づいて政権運用を主張しているが、その「民意」の意味は単なる庶民の意志を指すのではなく、「民」の代弁者である知識人の主張を指すのであるとい

う。また、徐復観は大衆文化の氾濫に危機感を感じ、官能的な享受のみに満足する大衆文化への追求は人間の自律精神を破壊し、反知主義の風潮を拡散させると警告する。そして、大衆文化が「文化中産階級」すなわちメインカルチャーを好んでいる人たちを駆逐することを問題視し、文学・芸術の社会的機能が喪失することによって、批判的思考を持つ個人を消滅させてしまうことになることになると危惧の念を抱いている。とはいえ、「大衆文化」の氾濫について、徐復観は「大衆」を直接的な責任者として扱わず、「大衆文化」の氾濫を助長した知識人への批判を行った。なお、徐復観は殷海光と同様に「五四新文化運動」のような知識人が主導した近代化の方針を主張し、知識人が理知と道徳の優位により大衆を率いて「新文化」を創建すべきであると主張している。

第七章では、徐復観と殷海光の学問観について考察した。両者は空理空論が近代化を阻害する要因と一致して認識している。このような認識を踏まえ、両者は、知識人内部の対立・紛糾・軋轢をもたらすイデオロギーの論争を排除されるべきだと指摘し、実践・実学・実証という「实事求是」の精神を主張している。このような「实事求是」の精神によって、両者の文化論ないし哲学思想は抽象的で難解な理論ではなく、どこまでも現実に即して問題の解決策を模索しているものだと言える。また、両者とも近代知識人の功利的学問観を克服するために、知識人が自分自身の言行を常に問い直すことが必要であると主張している。

しかし「实事求是」的学問観という共通した主張を持つにも関わらず、両者が中国伝統の学問観を捉える方に大きな相違がある点は浮き彫りにされた。

徐復観は、儒家思想に実践性と理想性が並存したため、儒家思想に従えば「实事求是」的学問観を育成できる同時に、学問を正視する態度も養成できると考えているが、その一方、殷海光は、儒家思想に批判的精神と個人の独立性を抑圧する権威主義が潜在し、この権威主義を排除しない限り、「实事求是」的学問観の育成が不可能であると批判する。

また、論理実証主義に立つ殷海光は、知識を実践・応用をする前に、実証による客観的な知識の獲得が重要であると主張している。それに対して徐復観は、殷海光ほどに実証の重要性を強調せず、知識の応用の前提としての正しい理想を自分に植え付けることが必要であると指摘している。

以上、本研究全体を通じて得た知見を、序章で設定した課題に応ずる形で整理した。これから明らかになったのは、これまでの先行研究のような「西化」と「保守」の単純な二項対立構造で考察するだけでは、殷海光と徐復観の思想の複雑性を理解出来ないということである。そのため、本研究では両者の複雑性を解明する手立てとして、両者の文化思想の共通点と相違点を明らかにした。

それについて、まず両者は、中国のみならず世界にも視野を広げ、世界の発展趨勢に強い感心を寄せ、世界発展のための中国文化のあり方を模索した。また、徐復観と殷海光の文化の捉える方は「物質と精神」「普遍と特殊」「伝統と現代」「東洋と西洋」という「五四新文

化運動」時期の単純な図式を離れ、両者とも中国伝統文化の本質が決して閉鎖的、一元的ではなく、多元的・開放的・自由的要素を有することを意識した。また、殷海光は文化の起源における精神要素に対する重視や道徳の必要性に対する主張から見ると、新儒家である徐復観に接続する位置にある。そして、殷海光の西洋文化受容に対する認識は、単純な「西化」とは考えず、伝統文化との適性、科学方法の選択など、多面的な認識に支えられた思考であることも明らかになった。

以上、取り上げた両者の共通点は、「西化派」と「保守派」の間に伝統文化の価値をめぐる対立の姿勢が希薄化されているという点である。ただ、それにもかかわらず、歴史に対する認識や中国文化危機の捉え方は、両者の相違を良く反映している。

つまり徐復観は儒家の持つ巨大な価値が底流として歴史を貫いて中国を支え、その底流があるゆえに、中国社会がある程度の自由と平等を保有すると考え、中国歴史の全体に対して常に肯定の姿勢を取る。それに対し、殷海光は漢代以降、中国文化の諸価値が思想的領域から政治的、経済的領域へ拡大できず、その結果庶民の「精神生活」が不在化に陥ったと認識しているのである。

このような中国歴史に対する異なる認識にどのような意味があるのか。つまり、殷海光は始源的中国文化の多元性・開放性を肯定しているが、この肯定は中国文化と西洋文化とに同様な多元性・開放性を有するため、むやみに西洋文化を排斥してはいけないことを説明するためのものである。そのため、殷海光は、中国にとって、近代化の方法が中国の歴史の経験あるいは中国伝統文化思想の中に求めるものではなく、個人権利の保障・民主政治の推進・科学精神の定着など西洋と同様な方法を採用すべきであると考えている。

一方、徐復観は近代化と人間精神の向上との関連性を否定し、アヘン戦争以来の屈辱的な近代化過程にもかかわらず、近代的価値が中国自身の歴史に蓄積され、そこから進歩の原動力を求めるべきであると考えている。そのような潜在力を示唆するために、徐復観は中国歴史および伝統思想に対して独自の解釈を行っている。彼による西化派への批判は伝統文化から近代的価値を再発見するための一環でもあったのである。

それゆえ、徐復観と殷海光が中国文化の進歩を通して近代化の実現を目指すという同じ信念から議論を開始したとしても、中国認識や拠って立つ知識の相違によって両者の考えは大きく隔たっていた。

殷海光から見れば、中国文化危機の原因になったのは、中国文化自身の「復古性」である。ただ、彼は如何なる文化においても伝統的な弊害が存在したが、近代化によってその弊害を克服できる、と考えている。そのため、中国伝統文化の各要素が克服されるべきものなのか保存されるべきものなのかということは、近代化の過程のもと新しい文化要素との競争によって自明になることであると彼は主張している。このような考えを踏まえて、殷海光は伝統文化復興の名義で行われた活動は、さほど重要ではなく、むしろ伝統を高唱する復古主義

者が中国近代化にとって最大の障害であると指摘している。復古主義者がいくら理想論やナショナリズムで飾り立てたとしても、彼らの主張から中国を救えない。より進んだ欧米を目標として、欧米近代化の路線に沿って従うことこそが試行錯誤を回避でき、近代化の効率的な方法であると殷海光は考えている。

ところが従来の殷海光研究は、彼の文化論を早年の過激な伝統文化批判と晩年の伝統道徳の価値の肯定に分け、その転向の理由を「現実への失望」によるものと解釈した。しかし、本研究の検討によると、殷海光の主な関心は発展と未来に置かれ、伝統を重要視しなかったと考えられる。彼が精力的に批判したのは「玄学」的思考方式や、「玄学」的思考方式を持つ復古主義者である。

殷海光の主張に対して、徐復観は近代化の病理が中国文化の危機をもたらしたため、危機を乗り越えるために、伝統文化を振興すべきであると主張している。そして、ナショナリズムに親和性を持つ徐復観から見ると、西洋の近代化が世界の普遍的法則であることをどこまでも信奉し、伝統文化を全面的に否定しようという西化派こそが中国近代化を破壊する張本人であると一蹴する。このように、文化問題をめぐる両者の論争は、ついに学派間の攻撃的になってしまったのである。

そして、本研究の検討を通じて、両者が持つ「实事求是」の精神は学問観のみならず、文化観にも現われていることを明らかにした。つまり徐復観は、儒家の教えが非合理で空虚な精神ではなく、生活の経験に立脚した、よりよい生活を具現化するための方法論だと強調している。その一方、殷海光における「玄学」批判・胡適批判・および道徳の実践を重視する傾向は、「实事求是」の精神が彼の内面の深いところで動作しているものであると言える。

最後に、徐復観と殷海光の間には、外省知識人とする共通点が存在することについて言及したい。両者は文化の大伝統が知識人の英知の結晶であると考えて重視し、それと同時に文化革新の担い手は普通の人々ではなく、権力者でもなく、知識人であるという認識を強く持っている。こうしたエリート主義の傾向は、中国大陸時代に国民党と密接な関係を持った知識人の経験に由来していると考えられる。そして、知識人の優位性を主張する両者は中国近代化の過程を考察した際に、彼らを阻害したのが空理空論で大衆を扇動する知識人であった。そのため自己の属する知識人集団が、中国近代化の挫折の責任を取るべき、という両者の主張は極めて特徴的である。

ところが、両者のエリート主義の傾向は、良く言えば、権力に対する勇敢な態度といえるが、悪く言えば、大衆から遠ざかっている知識人が果たして大衆の代弁者になれるのかという疑問である。殷海光の「東西道徳整合論」にしろ、徐復観の「儒家思想の近代的解釈」にしろ、「实事求是」の精神を主張した両者の思索は、結局理論の域にとどまり、中国の近代化について具体的で実行可能な方針の提示には至らなかった。その原因としてはエリート主義の影響が重要ではないだろうか。

## 論文審査の結果の要旨

学位の種類	博士（国際文化）	氏名	陳 熙
学位論文の 題 名	1950年代—1960年代における中国文化論の展開 ——徐復観と殷海光を中心として——		
論文審査担当者氏名 (主査)	勝山 稔 , 佐野正人 , 黒田 卓 , 大河原知樹 , 朱 琳		
論文審査の結果の要旨（1,000字内外）			
<p>本研究は、徐復観（じょ ふくかん）と殷海光（いん かいこう）の文化思想に対する比較を通して、「ポスト五四」世代 の思想のあり方を考察するとともに、中国文化論に関する両者の認識の特徴を明らかにしたものである。</p> <p>「ポスト五四」世代である徐復観と殷海光の文化の捉え方は、「物質と精神」「伝統と現代」「東洋と西洋」という五四運動時期に論じられた単純な図式を離れ、中国伝統文化の本質が多元的・開放的・自由的要素を有することを意識した点で両者は一致している。しかし、このような共通点を有するにもかかわらず、歴史に対する認識や中国文化危機の捉え方は、両者大きく相違していた。その差違を中心に本研究では「中国伝統文化」の認識・「科学」や「道徳」の認識・歴代の「知識人」の認識・両者の「学問」観などに注目し、多岐にわたる多角的かつ詳細な分析を試みている。</p> <p>徐復観は儒家思想に基づいて作り上げられた中国社会がある程度の自由と平等を保有すると考えていた。それに対し、殷海光は漢代以降、中国文化の諸価値が思想的領域から政治的、経済的領域へ拡大できず、戦乱が続き、経済と文化の発展が著しく停滞したと考えていた。この相違点に本研究はまず着目している。</p> <p>殷海光から見れば、中国文化危機の原因になったのは、中国文化自身の「復古性」である。このような考えを踏まえ、殷海光は伝統を高唱する人が「復古性」に支配された復古主義者と見なし、中国近代化にとって最大の障害であると指摘している。その一方、徐復観は、西洋の近代化が世界の普遍的法則であると指摘し、伝統文化を全面的に否定しようという西化派こそが中国近代化を破壊する張本人であると批判している。このように、文化問題をめぐる両者の認識相違は、両者間の論争に発展した。</p>			

そして、本研究の検討を通じて、両者が持つ「实事求是」精神の理解の相違は学問観のみならず、文化観にも現われていることを明らかになった。つまり殷海光は、「实事求是」の精神が人々の内面に潜在し表面上ではとらえにくいものと理解していたのに対し、徐復観は、儒家の教えが非合理的な精神ではなく、生活の経験に立脚したよりよい生活を具現化するための方法論だと強調しているという両者の見解の差を明確化した。

また、本研究の独創的な点については、幾つか指を折ることが出来るが、殊に両者の中国文化論の中で見出されるエリートの役割の共通性を発見した点にある。両者は中国の文化的伝統が歴代の知識人（エリート）の英知の結晶であると考えて文化形成の上で重要な役割を果たしたと指摘する一方、伝統文化を変革する中心的な存在は、権力者でも一般庶民でもなく、その時代の知識人が強い影響力を持っている。その点で相異なる見解を持つ両者のエリート意識が奇しくも一致している点が、本研究によってはじめて明らかになったのである。

審査会では、先行研究について、よりきめ細やかな検証と本論での対照が望ましいという意見が出たほか、徐復観と殷海光の西洋知識の受容経緯について、更なる掘り下げの要望などが指摘された。しかしながら実証的な手法により特記すべき成果をあげた意義は極めて大きい。

以上より、本研究成果は、論文執筆者が自立して研究活動を行うに必要な高度な研究能力と学識を有する事を示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。